援する民衆の背後からの協力があったからだ、と氏は言う。

その氏自身とゲリラ戦士の体験から、勿論シベリアの寒さだけは東辺道の比ではないが、衣、食、住ともに従軍の苦に比し堪え得るものと自ら言い聞かせていた、と云う。それが「生き抜く」原動力となったのではないかと言うのである。

（高知県　山本　明司）

機関車用の薪づくり

熊本県　南部吉正

十年の強制労働刑を背負わされて、樺太からシベリアの労働刑務所に送られ、最初に働かされたのが蒸気機関車用の薪づくりでした。当時シベリア鉄道の支線を走っていた汽車は、石炭ではなく薪をたいて動力源にしていたようでした。

建築資材として使用可能な材木は馬そりで運ばれ、伐採現場に残っていたのは白樺や泥柳、その他曲がったトド松、エゾ松の類いでした。それらの樹々を一・五メートルの長さにのこぎり引きして、大きな丸太は真ん中から半分に割るのです。六百グラムの一日分の配給黒パンは朝一度に食い尽くすので、午前中はまだ下腹に力が入って斧を振りおろす力も残っているのですが、午後になると空腹感が募ってきて、斧を振り上げるのもやっとの状態です。的は外れ、思うようにノルマは上がりません。

一人当たりのノルマは、高さ二メートル、幅五メートルの薪をつくることでした。二人一組になっての作業ですから、当然その倍の作業を仕上げねばなりません。

私たちの作業班は、身体検査の結果三級労務者の烙印を押された、つまり軽労働向きの人たちでした。総勢三十人、その大半が満州から送られてきた日本人と中国人のグループでした。取り交わされる言葉もロシア語、中国語、日本語の入り混じったものであり、二人組の相手が中国人の場合、お互いの意志を確認する

のも容易ではありませんでした。

素性のよい木は一～二回でうまく割れることがありますが、曲がった材や節の多い木は二～三度斧を振りおろしても割れません。斧を振りおろす寸前に地面に立てた木が倒れ込むこともあります。空振りをして、斧もろとも倒れ込むこともあります。第一、一・五メートルの薪の長さは、日本人の感覚からすれば長すぎるのです。もっと短い薪にすればよいのですが、機関車の要求でそうなっているらしく、短いサイズにするわけにはいかないのです。

私は汪という中国人とコンビを組んで作業をしていました。彼は中背ではありましたが、朝から晩まで不平を漏らしていました。

「サータカマー」「リーベンクイズ」「ワンパタン」といった罵詈雑言を繰り返し、あげくの果てはペッペッとつばを飛ばしました。この野郎という反発する気持ちは胸の中から突き上がってくるのですが、私はあえて彼と争う気持ちを抑えました。敗戦国の人間、それに彼がシベリアに送られたのも何らかの日本人との関係でそうなったのだろうという同情心も心の底にあったからです。言ってみれば、汪は戦勝国の側に立てる人間でしたから。

機嫌のよい日は、彼は故郷の黒河の街の話をして聞かせてくれました。そこには母と結婚して間もない新妻が残っているようでした。今ごろは妻が赤子を産んでいるかもしれないといって、彼は大きな嘆息を漏らすのでした。

夕暮れが近づくと作業やめの声がかかり、私たちは積み上げた薪のそばで検査を受けました。ナッザール（監督）は巻尺ならぬ白樺の枝でつくった棒で長さと高さをはかり、板の上にその作業量を書き込んでいきました。百パーセントあれば二日後のパンは六百グラムもらえるのですが、それを切ると半分の三百グラムに減らされるのです。割れずにたたき散らした薪を中に挟んだりして、私たちも知恵をしぼりました。だが大抵の場合そうした小細工が発覚してひどくしかられたものです。

私たちは作業が終わっても、ラーゲリ（収容所）に

帰されない日があるのです。機関車が来るので薪の積み込みを手伝わねばならないのでした。カンボイ（看守）はスコーロ（間もなく）というのですが、機関車はなかなかやって来ません。一時間、二時間と待つ中にあたりは暗くなってきます。寒さがじわじわと足の先からはい上がってきます。みんな疲れ果てているので、死んだように黙ってうずくまっているのです。うとうととしているころ、やっと遠くの方から汽笛が聞こえてきます。私たちは夢から覚めたように立ち上がり、森林地帯の中に一条開けている鉄路のかなたに眼を注ぐのです。機関車は闇の中に一条の光を放って、待ちくたびれた私たちの前に獣のような黒い巨体を横たえるのでした。

十月に入ると、シベリアの自然は冬の装いに変わっていきます。白樺はいち早く黄色く色づいた葉を振るい落とし、落葉松もその細い枝先を寒空に震わしているのでした。

シベリア特有の、ふるいにかけたような粉雪が音もなく灰色の空から舞う日々がやってきます。渡り鳥はいち早く南の国に渡り、シベリアの大地に残っているのは、地域で暮らす住民と囚人たちだけでした。

私たちはカンボイ（看守）に罵倒されながら、まだ暗い朝まだきから作業場へ急ぎました。粉雪に埋もれた用材から雪を払いのけ、二人引きののこぎりで、一・五メートルの長さに切断していくのです。のこぎりは二人引きなので、両方の呼吸が合わないとうまく切れないのです。相手が引くときはこちら側は押してやらねばならないし、その反対の場合は手順も反対にならねばなりません。うまく気持ちが合う場合は作業も順調に進むのですが、二人の気持ちに乱れが出てくるとのこぎり引きはすぐにその影響を受けるのです。そのたびに汪は「サータカマー」と叫び、のこぎり引きの手を休めるのでした。

私たち三十人の作業班に対して、看守は二人が付いていました。逃亡防止のために、彼らは肩から吊るした自動小銃を常に構えているのでした。その看守のために、私たちは薪を集めてたき火を絶やさない仕事も負わねばなりませんでした。囚人見張りのために、一

日中立ちづくめの看守の任務もまた容易なことではなかったようです。

ブルガジール（班長）は、ハルピンにいたという三十前後の白系ロシア人でした。彼は日本語を自在に駆使しました。殊にノルマが上がらない一日などは「このろくでなし」「おまえら生きて日本へ帰りたくないのか」「白樺のこやしになりたいのか」と言ってなじりました。私たちは冬に向かうに従って体力が衰えていくのでした。空腹と寒さと疲労のために思うように手も体も動かないのです。けがをする囚人が続出しました。足をすべらして、振り上げた斧をみずからのすねに打ち当てた人もいました。雪はよく衰弱した人間の足をすくいました。私たちは作業場への往復にもよく転びました。夕方、暗闇の中の帰り道には、バラックでたく薪を脇の下に抱えて歩かねばなりません。片手はのこぎりか斧、片手には薪を持っているのです。転ぶと立ち上がるのも容易ではありません。看守は「スカレイ、スカレイ」（急げ、急げ）と叱咤するのです。彼らとて早く任務を終えて、妻子の待つ我が家へ帰りたいのでしょうか。

バラックに帰ると、一杯のスープをもらうために一列になって炊事棟へ向かうのです。キャベツの葉が二〜三枚、底にジャガイモの小さいのが二〜三個も入っている場合は上々でした。スープは燕麦の粉を溶かした白い汁が普通でした。飯ごう一杯五百グラム、黒パンは朝一度に食ってしまうので、スープだけの夕食を済ますと、着のみ着のままで二段ベッドの上で横になりました。昼間の疲れですぐに眠りに落ちました。

眠りが早いだけに、目覚めも早いのです。体が衰弱してくると、夜半しょっちゅう小用に目覚めるのです。朝まで四〜五回小用に立つのは普通でした。一度目が覚めると空腹も手伝ってなかなか眠れません。殊にノルマが百パーセントに達せず、三百グラムのパンをもらった日の夜半は空腹のために朝まで熟睡できず、うつらうつらの半眠半覚の状態で朝を迎えるのでした。そんな朝を迎えると、その日のノルマはさらに下落するのです。一度つまずいた後は、雪の急斜面をころげ落ちるように作業成績も落ちていくのでした。

ついに凍傷のために両足の親指を損傷しました。冬間は羊の毛を圧縮してつくったワーレンキという長靴を支給されて履いているのですが、連日雪の上で作業をするので、さすがの防寒用長靴も水分を吸ってこちこちに凍りつくようになります。作業から戻ると、ワーレンキを乾燥するために作業班ごとに集めて乾燥室に出すのですが、その日私は、疲れ果てて一杯のスープをすするとすぐ寝込んでしまいました。隣のベッドに寝ている汪も、私を起こしてはくれなかったのです。

朝靴を履くとき、これは冷たいぞ、凍傷にいかれるかもしれないなという予感はあったのですが、その半乾きのワーレンキを履いて作業現場に向かいました。その日は、三寒四温の三寒に入る初日でした。朝からバラックを出ると、ツーンとする寒気が鼻孔の奥まで突き刺してきました。既に零下三十数度に気温は下がっているようでした。薄闇の中を列をつくって歩いていくと、人々の吐く息が白い煙のように立ち上がっていました。それでも作業を始めると、足指の冷たさを忘れてのこぎり引きをし、斧を振り上げました。

お昼になると、一頭立ての馬そりにスープを入れたボーチカ（おけ）を乗せて、ラーゲリから炊事担当の囚人がやって来ます。飯ごうにそのスープをもらい、パンのない昼食を済ます。たき火を囲みながら、人々は作業中に汗ばんだ足巻を乾かし、ワーレンキを火にあぶるのでした。

私も足首にずり落ちた足巻を外してみました。するとどうでしょう、感覚の失せた両足の親指が白くなり、水ぶくれしているのです。指先で押してみると、膨らんだ水泡のような袋の中に、水がたまっているのでした。

「凍傷にやられたらしい」

私はそばにいたA君に言いました。彼は私の指先を見て、

「本当だ、プルガジール（班長）に教えねばならんよ」

A君はたき火のそばにいた班長を呼んでくれました。彼は「痛むか」と私に聞きました。

「何とも感じないよ」

「感じなくなったら本物の凍傷だ。仕様がないな、夕方までお前はたき火の番だ」

班長に言われたとおり、午後はたき火のそばでうずくまっていました。帰り道はさすがに足指が痛みました。ワーレンキはこちこちに凍っており、その凍った靴が足指に触れるのです。それでも我慢してラーゲリに帰り着き、一杯のスープをすするとすぐに診療所に出向きました。

リトアニア人の主治医は、私の指を見るとすぐに命ずるように言いました。

「明日から入室だ、今診断書を書くので、班長にその旨申し出るように」

「わかりました、明日来ます」

私は急に痛く感ずるようになった足を引きずりながらバラックに帰り、ドクトル（ドクター）からもらった診断書を班長に見せました。

「そうか、当分休暇だな、ゆっくり治療しろよ」

白系ロシア人の班長は、そう言って私の肩を叩いてくれました。自分の不注意からしでかした凍傷でしたが、私は何となくホッとする気持ちでした。明日からノルマに追い立てられる負い目から解放される。たとえ両足の足指を失うことがあっても、命を絶たれることはあるまい。いや親指がおれの命を救ってくれたのかもしれない。

だがその夜は痛みのために眠れませんでした。班員が作業のために出払ってバラックが空になると、私は冷めたスープをペチカの上で温めて、ゆっくりした気持ちで朝食をとりました。バラック当番の老人が「痛むか」と聞いて、仮包帯をしている私の足をのぞき込みました。

「針で刺されるようにズキズキする」

私は老いた当番のソ連人に答えました。「おまえは幸せ者だ。凍傷で片足になった者はこのシベリアではザラだからな」

ラーゲリ内の医務室は一室だけで、十個あるベッドはふさがっていました。主治医のリトアニア人が、昼になったら重病人四人を本部の病院に送るのでベッド

があく、それまで診療室のベッドに横になっているように命じました。

診療所は昼間は外来患者がないので、あいているのです。忙しくなるのは、囚人たちが作業から戻る夕方からになります。ここには主治医のドクトルと、看護手だという年配の男がいるだけで静かでした。薬類が入っているはずの棚はほとんど空でした。私は手製の診療ベッドに横たわりながら、飾りの造花一つない殺風景な所内を見回しました。

「君、中国人か」

主治医のドクトルが近づいてきて話しかけてきました。

「日本人です」

「そうか、日本人か。見た目には中国人と変わらないのだな。ロシア語が話せるのか」

「日常語なら話せます」

「それはいい、東洋系の患者がことしに入って多くなったが、彼らは言葉が通じなくて困るのだよ」

「ドクトルはソ連人ですか」

「いやリトアニア人だよ、モスクワの医大で勉強していて捕まってしまったんだ」

ドクトルはそう言って苦笑しました。どんな理由で捕まったのか、聞いてみたい衝動にかられましたが、それ以上聞くのはやめることにしました。ドクトルも話したくないような顔色をみせたからでした。

昼過ぎ、二頭立ての馬そりが来て、重病人だという四人の患者が運ばれていきました。私は診療室からあいた病室に移りました。患者たちのうつろな眼が、私の方へ注がれました。

「おまえ凍傷か」

隣のベッドのソ連人らしい若い男が聞きました。

「親指をやられたよ」

「そうか、昨日は冷えたからな。しかしどうせやられるなら早い方がいいぜ」

「どうしてだ」

私は元兵隊らしい隣の男に聞き返しました。

「今にみてろよ、本格的なマローズ（厳冬）になったら患者がどっと押し寄せて、入室はできなくなるん

だ」

「そしたら患者はどうなるんだ」

「バラックで待機さ、ベッドがあくことはめったにないからな」

それはそうかもしれない、たった一室だけの診療所のベッドは十人分しかなかったからであります。

夕方になって、治療のために診療室に呼ばれました。手術をするとドクトルが言いました。不安はあったのですが、私はベッドの上に横たわりました。

手術は簡単なものでした。水ぶくれした皮膚を切開して水を出しただけでした。後に練り薬みたいなものを看護手が塗ってくれました。

「しばらく様子をみよう、肉が腐ってくればそこを取り除かねばならないから」

ドクトルはそう言って治療を終わりました。水ぶくれした後の親指は、既に紫色に変色していたのでした。患者の手製と思われる粗末な松葉杖をもらって、病室に戻りました。指先はズキンズキンと痛みを伝えてきますが、私は歯を食いしばって耐えることにしました。降りしきる粉雪とマローズの中で薪割りをすることを思えば、まだしも幸せな方ではないかと私は自分に言い聞かせていたのでした。

隣のソ連人の言うことには、塗られた薬は木炭灰を練り上げたものだということでした。

「子供だましだよ。こんなシベリアの果ての囚人病室に、本物の薬なんて送ってくるはずはないからな」

彼はそう言ってうつろに笑っていました。

それから五日後、私はドクトルの執刀によって、腐りかけた足指の肉をそぎ落とされました。麻酔もない手術でした。「痛い、ボーリ!」と叫ぶ私に、ドクトルは「我慢しろ、すぐ終わるのだ」と叱りました。

その日私は、一日中声を殺して呻き続けました。涙がとめどもなく流れてきて、粗末な枕をぬらしました。死ぬことはない、いやこれは死よりも苦しい刑罰ではないか。おれが一体どんな罪を働いたというのだ。

十年の労働刑を宣言されたとき、私は敗戦国の人間なのだ、諦めるよりほかないのだと心の中で自分自身を慰めました。私の刑の理由は、ソヴィエトロシアの

国家機密を盗んだというものでした。越境してきたソ連側のスパイを取り調べて、国境地帯におけるソ連軍の布陣状況、兵力、装備などを聞き出したのが罪に当たるというのです。越境してきたスパイを取り調べるのは、主権国家として当然の仕事なのです。だがその事が通じないのが戦いに敗れた国民の悲劇だったのです。

その時のことが罪に値するとは今も私は考えてはいません。自分に与えられた任務を忠実に行ったことであり、独立国としての権利を行使したに過ぎないという意識は、あれから四十八年を経た今も全く変わってはいないのです。

時間の経過とともに、痛みは少しずつ薄らいでいきました。治療のときのぞいてみると、右足の親指は白い骨が見えるほどに肉がそぎ落とされているのでした。

「二か月もすると、肉は元どおり盛り上がってくるよ」

ドクトルは事もなげに言うのでした。

病室の囚人は激しく入れ変わりました。私の隣のベッドのソ連人も、ある日呼び出されて、もといた伐採班に戻って行きました。あいたベッドは、その日のうちに新しい患者のためにふさがりました。マローズの夕方は、凍傷にいかれた患者たちが診療所の前に長い列をつくっているのでした。

クリスマスも正月も、知らぬ間に過ぎていました。入室して一か月が過ぎていたのです。病室の給与はバラックの場合より少しましのようでした。十グラムの砂糖が配給され、二日越しに二十グラムほどの羊の肉がつきました。

ドクトルが言ったとおり、削り取られた足指の肉も少しずつ盛り上がっていました。私は病室から追い立てられる日のことを思うと憂鬱でした。せめてもう二か月、いや春の日差しがこのシベリアの大地に降り注ぐ日まで、この病室で過ごしたいと切に思うのでした。

朝起きて二百グラムのパンと一杯のスープをすすり、検温を済ますと九時過ぎころから診察が始まります。もはや木炭灰を塗りつけることもありません。ドクトルは私の指先を見て、「カーク、ゼラー」（気分はどう

だ）と呼びかけるだけです。

会話も少ない病人たち。彼らは瞑想にでもふけっているのか、それとも遠く離れた故郷の肉親の上に思いをはせているのか、それとも明日にもここを追い立てられる自らの運命におののいているのか。

私も七年近く相まみえていない両親と故郷のことを思うのでした。用水の水の引いた小池にタモを持って魚を追った少年の日、日課であった農耕馬を夕方馬屋から引き出し、裸馬にまたがって村の東側にある溜池まで駆けていた日々。私は乗馬は得意でした。サラブレッドの種でもひいているのか、わが家の栗毛は脚が長く、走るのは村一番の駿馬でした。小学校からわが家に戻ると、馬草刈りは子供の役目でした。親たちは野良に出て、日没にならぬと戻ってきません。勢い馬草を刈り、それをハミ切りという切断機で食べよいように刻んで、米糠を混ぜ、飼い葉を馬に食わせるのは私の日課の一つでした。

あの栗毛はどうなったのか、たしか私が入営した後で、軍馬として買い取られていったことを、父が手紙で知らせてくれたことがあったな。

そんな思いにふけった夜は、決まったように夢を見ました。タモで魚を追っていた私のそれに、大きな鯉が入った夢でした。だがタモの中の鯉をつかもうとすると、鯉は大きく尻尾を振って私の手中から逃げ出すのでした。

病室の患者を専門の大きな囚人病院に送ったり、労働班に送り返したりするのは、ドクトルの権限でした。ラーゲリにはその外に軍医がいたようですが、病室に顔を見せることはありませんでした。

患者たちの噂によると、ドクトルはベッドをあけるために、まだ完全に治癒していない患者を労働班に送り返すこともあるというのです。殊にゲネラル・マローズ（大寒）の後、凍傷患者がどっと押しかけたときなど、包帯を巻いたままの患者が何度も送り返されていったのを私も知っています。ソ連人患者たちは、まだおれは治っていないとドクトルに突っかかる場面も見ました。一部の患者たちは、ドクトルにもノルマがあるので、仕方ないのだとさめた目で見ている者も

いたのでした。

私が新しい労働班に送り返されたのは二月の末でした。班は鉄道班ということでした。まだ寒気は厳しく、この後四～五回のマローズを経ないとシベリアの春はめぐっては来ないという時期だったのです。

次の日から早速作業に駆り立てられました。私たち約三十名は、それぞれ木製のスコップようの道具を肩にしてラーゲリの門を出ました。

作業は、レールのへこんだ跡に、スコップみたいな道具で雪を押し込む仕事でした。土盛りした路盤は軟弱なのか、試運転の機関車が通るとへこんでしまうのです。本来ならばへこんだレールの下に土か石を押し込むべきですが、大地が凍りついているために土は掘れず、応急処置として雪を押し込み、そこに水を注いで凍らせるのでした。

何といい加減な作業だろうかと私は思いました。こんなことで満載した木材を十数両も牽引する貨物列車を通すことができるのだろうか。しかし考えてみれば、ソ連はすべてが計画、計画で作業を進め、ノルマでそれを絞り上げているのです。ヨーロッパ、ロシアに木材を輸送するのは急務であるのでしょう。土の凍りが解ける春を待って土盛りするなど、悠長なことは言っておれないのです。

私たちはレールの二本の側に二列に並んで、まくら木の下に雪を踏み込みました。班長が号令をかけて、ホーイ、ホーイと答えながら雪を押し込むのです。それでもへこんだレールは少しずつ持ち上がっていきました。押し上がったレールの下の雪に、おけから運んだ水をぶちまく班員が四人いました。だが、その作業は長くは続きませんでした。三月に入って、暖かい日には雪が解けるようになったからでした。

次の作業は、線路の延長でした。台車に一日分のレールを積み込んで、継ぎ足していくのです。まくら木に釘を打ち込み、ナットでレールを締めていくのです。レールにはU・S・Aのマークが入っていました。三十メートルはあろうかという長いレールでした。

レールを締め終わるか終わらない中に試運転の機関車がやってきます。かつて私たちが機関車用の薪をつ

くり、積み込んだそれでした。三月に入っても、素手で鉄類を握ると皮膚が凍りついて離れないことがありました。私たちは毎日レール継ぎをしました。伐採地が奥に延びるに従って、木材を運ぶ線路も後を追うように延びていったのでした。

【執筆者の紹介】

住所　熊本県下益城郡城南町吉野四六三―二

元職　樺太特務機関員（元陸軍曹長）

昭和五十六年より全抑協熊本県連事務局長

昭和六十三年より同県連副会長、

シベリアに材をとった小説集を四冊発行

筆名　波木里　正吉

（熊本県　高瀬　潤吉）